

【書評】

## 「毎日あほうだんす」ということばが、 毎日頭の中で鳴り響いている

トム・ギル著『毎日あほうだんす—寿町の日雇い哲学者西川紀光の世界—』

キョート出版, 2013年3月, 159頁

高橋 源一郎

トム・ギルさんの『毎日あほうだんす』は、横浜・寿町のドヤ街に住む、(現時点では「元」)日雇い労働者、西川紀光(にしかわきみつ)さんへのインタビューをもとに、この希有な、「市井の哲学者」と呼ぶしかない人物の実像に迫っている。ギルさんが質問する、そして、西川さんが答える。その、西川さんの答え方が、ちょっと変わっている。

「私の名前は西川紀光。にしかわきみつ。生まれは1940年, 昭和15年。ジョン・レノン, アル・パチーノ, ピーター・フランプトン, ラクエル・ウェルチ, ジャック・ニコラウス。相撲の大鵬と同じ年ですよ。親は大げさな名前を付けた。戸籍にある正式な読み方は「ノリミツ」となっていて「この世紀のひかり」というつもりでつけたと思います。ナショナリズムの時代で、ちょうど神武天皇の2600周年。ダークエージ(暗い時代)ですよ……港湾労働をやっていたとき、チェスタートンの名前をFENのビート・ミス・ショーで何回か聞いて、なんとなく読もうと思いました。子供のとき、ブラウン神父の探偵ものを読んでいましたが、今度は評論を読むようになって驚きました。アナロジー, アレゴリー, たとえ話がすごいですよ。笑いますが、納得しますよ。推薦ですね、チェスタートンの評論」

すごい。1940年生まれの人たちの人選、自分が生まれた時代への反応、それから、チェスタート

ン。なんて渋い趣味なんだ。いまのほとんどの作家や評論家から失われた、オーソドックスな知性をぼくは感じる。

でもって、繰り返していうけれど、西川さんは「ドヤ街の日雇い労働者」だったのである。

「ドヤ街」の「ドヤ」は「ヤド」をひっくり返した、日雇い労働者向けの安い「宿」がたくさんある場所を指す。日本の三大「ドヤ街」は、西川さんが住んでいた、この横浜・寿町、それから、東京の山谷、そして大阪の釜ヶ崎。そういえば、ぼくの父親も、経営していた鉄工所が破産した直後、行方不明になった時、しばらく山谷の「ドヤ」で暮らしていたと聞いていた。ぼくも二十代の初めの頃は、西川さんが働いていた寿町の近くの自動車工場や化学工場で働いていた。それから、鎌倉で「土方」として三十過ぎまで働くことになるのだが、そうやって肉体労働をしていると、だんだん頭脳の方は干上がってくる。確かに、最初の頃は、なんとか本を読もうとした。けれども、だんだん面倒くさくなってくる。つい一杯、焼酎を引っかける。するともうその瞬間から、眠くなってくる。本を読むのは明日にしよう……。でも、翌日になると、そんな気分はすっかり失せ、やがて、本とか思考とかそういう一切から遠ざかってゆく。なのに、西川さんは、その長い、日雇い労働者としての生活の中で、本を読み、独特の考えを深めていったのだ。

さて、もう少し、西川さんの生涯を追ってみる

「毎日あほうだんす」ということばが、毎日頭の中で鳴り響いている

ことにしよう。

西川さんは、熊本県熊本市で生まれた。西川さんが生まれた1940年は、戦争の真っ只中だ。5歳の時、西川さんは山鹿に引っ越す。お父さんは銀行員、お母さんは、地主の娘。だから、貧しい環境に育ったわけではなかった。高校を卒業して、自衛隊に入った。それから自衛隊を辞め、横浜に行き、日産自動車生麦工場で働いた（ぼくが働いていたのは、同じ日産の、新子安にあった横浜工場）。そして、

「川崎のドヤのようなアパートに暮らしていたが、ある日となりの男が『土方の仕事を紹介してやるよ』と言ったので、応じました。

——一流会社を辞めて、土方になるのは……？

ちっともおかしくないよ。だって、当時日産自動車の賃金は1日900円でドカタは1日1500円ですよ」

ここから、西川さんの「ドヤ街」での暮らしが始まるのである。西川さんは主として港湾の荷役の現場に行くようになった……と書くと、やはり、港湾の荷役作業をしながら独自の思想を作り上げた、アメリカのエリック・ホッファーを思い浮かべる（ぼくも大好きだった）。そして、西川さんは、本の山で埋まった、小さなドヤの一室で、何時間も本を読み、ラジオで大好きなジャズを聞き、時にはギターを弾く、完全に自由な生活をするようになったのだ。西川さんの読書の範囲はとんでもなく広い。時には、自然に英語を使いながら、あらゆる学問の知識を駆使しつつ、西川さんは、ギルさんの質問に答えてゆく。

西川さんは、いったい、何者なんだろうか。

完全な自由人？ 独自の学問を作り上げた、市井の哲人？ ただの変人？

「日本のホームレス男性には元日雇い労働者が多い。彼らのナラティブは様々だが、『自立』を強調する人が多い。彼らが想像する『サラリーマン』は自立していない。毎日同じ職場に行き、部長に頭を下げなきゃならない。家に帰ったら、今度は妻に怒鳴りつけられて、また頭を下げなければならない。

一方日雇いは会社にも家庭にも縛り付けられていない。毎朝、今日は現場に行くか、休むか、自分で決められる。外部から見れば貧しい生活だろうが、自立性、あえて言えば『自由』がある」

もしかしたら、西川さんは、ぼくたち日本人にとって「そうだったかもしれない、もうひとりの自分」なのかもしれない。ぼくたちは、ほんとうに「自由」であるためには、それ以外のすべてを失わなければならないのだ。

いま、西川さんが暮らす寿町の住人の大半は「生活保護受給者」だそうだ。そして、年をとり、働けなくなった西川さんも、そんな住人の一人として「福祉マンション」と呼ばれる建物の小さな部屋に住んでいる。いま、西川さんの部屋に本はない。

ギルさんが、西川さんをインタビューし、彼の言葉として「今日明日生きられるといい、それで精一杯。毎日あほうダンス、まったなし」と書きとめた。すると、西川さんは「あほうダンス（あほうの踊り）」ではなく「アフォーダンス（affordance）です。これは生物学の話。遺伝学やダーウィンを超えた自然科学の話」と訂正を求めた。

「英語の動詞 afford は『何々をする、買う余裕がある』という意味で知っている日本人が多い。例えば I cannot afford [to buy] a new car（私は新車を買う余裕はない）。必ず can（できる）と一緒に使う。しかしもう一つの使い方もある。それは何かを『提供してくれる』という意味で、例えば this room affords a lovely view は、自然な日本語に訳すと『この部屋から素敵な風景が見える』だろうが、文字通りに訳すと『この部屋は素敵な眺めを提供してくれる』となる。

ギブソンのアフォーダンス概念は後者に近い。つまり、部屋が素敵な景色を提供してくれるのと同じように、椅子は私に座る可能性を提供してくれるし、ドアは部屋に入る可能性を提供してくれる。こういうアフォーダンスを全部合わせると、環境が人間に

「毎日あほうだんす」ということばが、毎日頭の中で鳴り響いている

与えてくれる可能性の全てになる。この用語は視覚心理学や人間工学ではよく使われるが、紀光用語としては人間の自由が環境に制限されている意味になる。人間はなんでもできるという純粋な自由論は間違いで、実は人間は環境に許されることしかできない」

ギルさんが聞き間違えた「あほうダンス」こそ、西川さんの存在のもっとも奥深くを示す言葉だったように思える。完全な自由に見える西川さんは、自由がその裏側に巨大な拘束を抱えていることを知っている。わたしたちはどうだろうか。西川さんのように自由だろうか。いや、自由ではないことは知っていても、その自由ではないことの裏側にある、巨大な拘束について知ろうとさえしないのではあるまいか。